N・プーランツァス著
資本の国家
現代資本主義国家の諸問題

国家論の原型と到達点を開示

ネオ・グラムシ主義者としてのプーランツァス像を解く

加藤哲郎

グラムシとプーランツァスとの関係、といっても首をかしげる読者が少なくないであろう。一九七九年に急逝したニコス・プーランツァスの名は、わが国ではもっぱらアルチュセール派「構造主義的マルクス主義」と結びつけて理解されてきた。この事情は欧米でも同様であり、いわゆる「マルクス主義国家論ルネサンス」の発端となったプーランツァスとR・ミリバンドの論争は「構造主義対道具主義」と位置づけられてきたし、S・クラークなどは、「ネオ・グラムシ主義者」ミリバンドに対するプーランツァスの批判の中に「構造・機能主義的社会学」への傾斜を見出したほどであった。

F・エンゲルス

しかし、最近発表されたB・ジェソップのプーランツァス論は、プーランツァスこそ晩年の正しい意味での「ネオ・グラムシ主義者」であると評した点で、従来のプーランツァス像を再考させるものであった。この視角からすれば、プーランツァスは「構造主義者」である以前に「ネオ・グラムシ主義者」なのであり、しばしば問題とされる七〇年代半ばにおけるプーランツァス理論の〝転換〟――階級闘争＝実践の強調と「国家＝関係説」の提唱、毛沢東主義的戦略からユーロコミュニズム左派への接近――も、もともとプーランツァスに内在されていた「ネオ・グラムシ的」視角の再生として位置づけられる。

また、これまでわが国に翻訳・紹介された二著、六八年の『政治権力と社会諸階級』（田口富久治他訳、『資本主義国家の構造』未来社）と七〇年の『ファシズムと独裁』（田中正人訳、社会評論社）は、プーランツァスが最もアルチュセールに接近しこの「ネオ・グラムシ的」本性が後景に退いていた一時期の著作であったことになる。こうしたプーランツァス理論の生成・展開を解く鍵となるのが、本書『資本の国家』（原題『国家』、パリ、一九八〇年）に収められた諸論文であり、ジェソップの右の評価の出発点となったのも、本書第二章に収録された六五年の論文「グラムシ――サルトルとアルチュセールのあいだで、国家におけるヘゲモニーの研究の諸前提」であった。

プーランツァスの遺作『国家、権力、社会主義』（七八年）の翻訳さえ未だもたないわが国の読者にとっては、この第二章は、プーランツァス国家論の原型を知るうえで貴重なテキストであり、かつ、第一章「過程」、第三章「資本の国家」、第四章「権力に関する諸問題」、第五章「政党の危機」は、〝転換〟後の七六―七九年に発表されたインタヴュー形式の論稿でその到達点をわかりやすく示すものであるから、すでに翻訳された二著を間にはさむことにより、レーニン、グラムシ以降の最もすぐれたマルクス主義政治理論家の一人であるプーランツァスについてのアウトラインを得ることができるのである。

A・グラムシ

L・アルチュセール

無論、本書は、プーランツァス理論を一基軸として展開した七〇年代「マルクス主義国家論ルネサンス」についての予備知識をもたずとも、それ自体としてきわめて知的刺激に満ちた現代資本主義国家論となっている。「訳者あとがき」も述べているように、もっぱらマルクス、エンゲルス、レーニンらの文献解釈から「マルクス主義国家論」を構成してきたわが国ではなじみにくいかもしれない

が、資本主義国家の現代的危機に興味をもちそこからの革命的活路を見出そうとする読者には、むしろ新鮮な思索の契機となるであろう。

わが国でも一部用いられはじめたプーランツァス国家論に独特な諸概念、「国家＝力関係の凝縮」「階級分派」「権力ブロック」「支持階級」「イデオロギー装置」「抑圧装置」「権威主義的国家主義」「国家内的諸矛盾」等々の正確な含意が、本書ではわかりやすく与えられている。

アルチュセールやバリバール、総じて「構造主義」との距離と相違点も、本人の口から語られる。ギリシャでの生いたち、サルトルを経てのマルクス主義への接近、ユーロコミュニズムやフランス共産党への態度、レーニン主義的「プロレタリア独裁」や「二重権力」戦略への批判的立場、等々も明解に説みとれる。注意深い読者ならば、彼の遺言ともいうべき第一章のインタヴュー（七九年七月）のなかに、政党・労働運動とエコロジーやフェミニズムなど非階級的社会運動との理論的連関を把みきれないままに自らの生命を絶つにいたった彼の晩年の苦悩を見出すかもしれない。

フランス語の翻訳について評者は多くを語る資格をもたないが、いくつか気になる点もあった。privatisation の「私企業化」や force publique の「警察力」は、文脈からしてそれぞれ「私化」「公的強力」でよかっただろう。邦訳五八頁の「新職能組合主義的＝制度主義的潮流」、六八頁の「脱イデオロギー状況を含意する科学」などの箇所は、より原文に即した訳が望ましかったろう。

とまれ、プーランツァスの思考の難解な筋道をわれわれに親しみやすいものとして提供した訳者の労を多としたい。欧米マルクス主義は「ポスト・プーランツァス」